

彼女の銀と僕の嘘

英語英文学科 3年 神保直矢

すごく嫌なことがあった。

僕は、夜になって人が多くなったのに、どこか無機質な駅の改札を通りながら、少し前に見た光景のせいで回転しなくなった頭を、無理やり動かして考える。考えるといつても、それが理解できなかったわけじゃない。一目見ただけで、どういう意味があるのかはわかった。とてもわかりやすかった。だから、考えたいのは、整理したいのは、嫌だと思う自分の心についてだ。

確かに、今、すごく嫌な気分だけれど、どうしようもないくらい落ち込んでいるけれども、この気持ちは、はたして、正当なものなのだろうか。

はつきり言って、僕には関係のないことだ。なんで、何も関わりがないことを、僕が気にしなければいけないのだろうか。僕がどんな気持ち

になったところでどうなるものでもないし、どうにかしたいとも思わない。だから、こんな気持ちを抱くのは不純でしかないはずだ。できるなら、すぐにでも忘れてしまいたい。

でも、忘れたいと思うこと自体、気にしているという証拠で、だとすると、そう思う心そのものをどうにかしない限り、逃れられはしないのかもしれない。

もし心が捨てられるとしたら、たぶん生ゴミだろう。いや、粗大ゴミかもしれない。腐っているか、壊れているか。違いはその程度だけだ。

ゆっくりと、プラットホームへ続く階段を上る。踏み出す足は重く、顔を上げるのも億劫だった。左手を手すりに乗せ、力なく引きずる。細い点字ブロックの付いたステップが、一定のペースで後ろへと流れていく。足が同じ動きを

繰り返す。

何だか、一瞬がずっと続いているようだ。

うなだれたまま階段を上りきると、じんわりと汗ばんだ体を涼しい空気が包んでくれた。少しだけ解放された気がする。

目の前に電車が停車している。ちょうど各駅停車だった。慌たたくドアから流れ出てくる人を、鬱陶しく思いながら避けて歩く。でも、空気の抜けるような音を立てて、ドアが閉まっていく。急ぐのも面倒だったので、誰も座っていないベンチに向かう。焦ったつてろくなことはない。スーツの男の人が階段を駆け上がったが、間に合わず、電車は行ってしまった。何事もなかったかのように、男の人は歩いていった。その背中を見ていると、なぜか溜め息が出た。

ベンチに座って辺りを見渡す。夜のホームに

は、ほとんど人がなかった。たった今電車が出たからだろう。

横の自動販売機の照明がやけに明るい。あれだけ自己を主張している存在が、他にあるだろうか。

向かいのホームの行列が目に入る。携帯を見ている人。友人と笑い合っている人。ただ立っている人。いろいろな人が同じ列に並んでいた。僕もあの人達と同じ、大勢の中の一人に過ぎない。人間としての価値は何も変わらない。今は線路を二本隔てているけれど、たとえどれだけ離れたところで、彼らとの距離が遠くなることはない。あの中で、いつたいどれだけの人が自分の無意味さに気付いているのか。

ベンチの背もたれに体重を預け、空を見上げる。夜の暗幕に黄色く光っている月が浮かんでいる。ぼんやりとした半月だった。星はない。きつと、街が明るすぎるのだろうか。月明かりで雲が動いているのがかすかにわかるだけで、僕のいるところからは気が遠くなるほど遠い。

暗い空から目を落とすと、煌々と輝くライトが目が眩んだ。

あれから時間は経ったけれど、嫌な映像はまだ消えてくれない。意識したくなくても、色褪せた断片が無音で再生されてしまう。モノクロ

の世界の中で、彼女は幸せそうに笑っている。

煙草が吸いたい。

喫煙所まで移動するのは面倒だ。ここで吸ってしまおうか。周囲には誰もいないが、たぶん誰かがいたところで気にしない。駅員に見られても、注意されることはないだろう。鞆から煙草を取り出す。だが、ライターが見つからない。煙草と同じ所に入れたはずなのに。探していると、ひとりの女性が階段を上ってホームにやってきた。

手が止まる。

とつさに煙草の箱を鞆に隠す。

どうして ここに？

挨拶したほうがいいだろうか。いや、どうせ僕には気付かないだろう。僕と彼女は知り合っていない。僕なんて覚えていないかもしれない。下手に声をかけて変な感じになるのはごめんだ。無視するに越したことはない。先に気付いてさえしまえば、気付かない振りができる。

ところが。

「中瀬くん？」

彼女のほうから、声をかけてきた。

僕に気付いてくれた。

僕の名前を、覚えていてくれた。

「あれ、天城さん」まるで今初めて彼女がいるのを知ったように、僕は軽く会釈する。ただ、彼女の顔をまともに見ることはできない。「何してるの？」

「今から帰ると」。中瀬くんは？

「同じ。CD屋行った帰り」

口調がぶっきらぼうになっているのが自分でもわかる。緊張している証拠だ。汗がじんわりと体表から染み出してきた。暑い。

早くどこかに行ってくれないだろうか。どう

せ話することなんてない。

彼女は僕のほうに歩いてきて、そのまま通り過ぎていった。

…… 本当に行っちゃったのか。

いや、それでいいんだ。彼女と話せば話すだけ、僕の思う僕らしさが褪せていく。

しかし、そのまま行ってしまふかと思った彼女は、僕の隣に座って、持っていた鞆を膝の上に置いた。

近い。

体が委縮する。

心臓が強く鳴る。顔が火照る。

彼女は僕を見ている。

僕は線路を見ている。鈍く銀色に光る線路を。

「CD屋って……タワレコ？」僕を見たまま、

彼女は訊いてきた。

「そっただけ」

「いつ？」

「さっき」僕は短く答えて、横目で彼女を見る。彼女はすでに僕から目を離し、レールのほうを向いていた。

「じゃあ、やっぱりあれ、中瀬くんだったんだ。そうじゃないかなと思っただけ。私もさっきいたんだよ、そこに。話しかけようとしたんだけど、目が合ったのに知らんぷりされちゃったから、違う人なのかなって。すぐに出ていった。さっさとさ」彼女は優しく微笑む。

「そっなの？ 全然気付かなかった」

嘘だ。

本当はちゃんと気付いていた。彼女がいて気付かないわけがない。その上で無視したただけ。それ以外の選択肢なんて、考えることすらしよつとしなかった。

「まさか、それで追いかけてきたとか？」僕は冗談っぽく言った。彼女が僕を追いかけてくるなんて事実はないと確信していたからこそ、口にするのができた、笑えないジョークだ。

もちろん彼女は笑っていない。

もしかして、気に障ってしまったのだろうか。充分にありえる。まあ、嫌われたなら嫌われた

でいい。

そのほうが楽だ。

そつ、いつそのこと、嫌われてしまいたい。

そのほうが、どう考えても楽だ。

楽なのに。

「そっだよ」

彼女は、微笑みながら、言った。

「え？」

「なんちゃって。ドキッとした？」

「……なわけないだろ」

ジョーク……だよな？

全然、笑えないよ。

本気で言っただんじやないとわかっていても、鼓動は更に激しくなった。

隣のホームに電車が来た。騒音が響く。大きくなった心臓の音が、より大きな振動の波でかき消される。その間だけ、何も感じないでいられた。並んでいる人たちが一斉に動きだす。電車の動きが止まると、心臓の音が余計にうるさく聞こえた。

電車が走り出すまで会話はなかった。彼女に悟られないように、呼吸を整える。それだけで少し落ち着いた。

「何買ったの？」静かになってから、彼女が訊いてきた。

「洋楽だよ。たぶん言ってもわかんない」

「あ、ちょっと馬鹿にしたでしょ」

「うん。した」

「ひどっ！」彼女は陽気に笑った。その笑顔は楽しそうだった。勝手な思い込みかもしれないけど、そう思った。だけど、さっき見たあの幸せそうな笑みとは、明らかに違う。

そこに含まれている心の重みが、全然違う。少し切なくなる。

また会話が途切れた。今度は電車のせいじゃない。月を見る。月光が雲に透けていた。

段々と、僕らのいるホームに人が増えてきた。次の電車までまだ時間があるのに、もう並んでいる人もいる。

「聴くの？ 洋楽」沈黙に耐えきれなくて、僕は強引に会話を続けようとする。

「言われればわかるかも。中瀬くんは？ どんなの聴くの？」

「サムとか、エアロとか……。あんまり詳しくはないけど」

「エアロって、エアロスミスだよ。そのくらいはわかるよ」彼女は背もたれに身を預ける。「そのくらいしかわからないんだけどね……」

しかも名前だけ」

「それ、わかるうちに入らないって」僕は無理に笑顔を作る。彼女もそれに応えてくれた。

「音楽好きなの？」

「うん、まあ」

「へえー。なんか意外」彼女は腕を組む。

「意外ってなんだよ」僕は苦笑する。

「なんか、中瀬くんってそついつのに興味なさそうなイメージだったからさ」

「何それ。そんな風に見える？」

「見える」

僕は頭を掻く。意外だとか、イメージだとか、そんな主観的で自分勝手なもので判断されるのは、はつきり言っただけだった。今までまともに話したこともないのに、僕の何がわかる。勝手に決め付けておいて、勝手なことを言わないでほしい。

「じゃあ、今度さ、何かCD貸してね」僕の心境も知らずに、彼女は話し続ける。

「ここで嫌な顔をするのは簡単だけれど、僕は快く答える。別にいいよ。どんなのがいい？」「どんなのって言われてもなあ。正直、全然知らないから……。とりあえず、中瀬くんのおススメで」

「人に勧められるほど、一言言ってるってわけじゃないんだけどね」

また、煙草が吸いたくなった。調子を合わせているから、ストレスが溜まってきたのかもしれない。それでも今は我慢しなければいけない。

もう話すことがなくなってしまった。必死で話題を探しているが、見つからない。だって、僕と彼女に共通項なんてないから。

だから、これ以上言いたいこともなければ、訊きたいこともない。……本当に、本当にない。そもそも彼女と一緒にいること自体が僕の許容範囲を超えている。

ここにいることに疲れてきた。早く電車が来ないだろうか。電光掲示板を確認する。当分来そうにない。

僕が黙っていると、彼女は意外なことを言った。

「さっきさ、絶対気付いてたでしょ」

また、ドキッとした。

彼女が言った言葉の真意がわからないからじゃない。身に覚えがあるからだ。

彼女はじつと僕を見ている。その視線をやり過「そつと、脚を組んで空を見る」

「……は？ 何が？」見苦しいかもしれないが、僕ははぐらかす。無駄だということは明らかだけれど。

「さっきのこと。私がタワレコで見たって言う

たとき、気付かなかったって答えたけど、ほんとは気付いてたでしょ」彼女は言う。少し怒っている感じのする口調だった。

そんなことはないと思うが、何だか責められているような気がして、彼女を直視できない。「……いや、本当にわかんなかったんだって。けつこう人いたしさ」

「嘘」

「……………」

まっすぐに、彼女は僕を見ている。逃げるように、僕は月を見ている。

「中瀬くんさ、なんか、私のこと避けてない？」

「僕が？ どうして」僕は冷静を装って答える。

「だって、さっきもさ、目が合ったのに無視されたし」

「だから、それは……」

僕は言葉に詰まる。バレしてしまったか。上手くやったつもりだったのに。それとも、どこか不自然だったのだろうか。ああいう場面には慣れているつもりだったんだだけ。

誰かを避けるのは彼女が初めてじゃない。今まで生きてきて、何度も経験している。彼女に対してそういうことをするのも、今回だけのことじゃなかった。

たとえばすれ違ったとき。
たとえば近くに座ったとき。

たとえば今日みたいに、偶然見かけたとき。
必然性と必要性がない限り、話したりなんかしなかった。

面識があるとはいえ、知り合いと言えるほどの関係ではないし、だからわざわざ話しかけることもないと思った。

話せば話すだけ、自己嫌悪に陥るから。優しい人、面白い人、素敵な人。自分とはかけ離れた誰かを演じてしまつ、見栄を張ってしまつ自分がとても嫌になるから。

一緒にいる間はいい。彼女と会話をするのは楽しい。それは認める。できるだけ長く傍にいたいと思うし、彼女のことを知りたい、僕のことを教えたいとも思う。

でも、彼女と離れて、自分が何をしたかを思い出すと、恥ずかしくなる。彼女の相手をしている自分はとても馬鹿みたいで、後には後悔しが残らない。

だから、どこかに行くといつ彼女を探してしまつ自分をなんとか抑えつけて、平静を保とうとする。できるだけ彼女に近づかないでおこうとする。その結果、避けるようになってしまつつまり、今のこの事態はイレギュラーなのだ。

彼女が僕の名前を覚えていたことも、僕に話

しかけてきたことも、僕にこれほど絡んでくることも。

体が熱い。顔に汗が浮かんでいる。それを彼女に見られたくなくて、拭きたいけれど、その行為すら恥ずかしい。

気まずい雰囲気はどうにかしたくて何か言おうとするけれど、声が裏返りそうだったから止めた。

「ねえ、どうなの？」彼女はしつこく訊いてくる。

「まあ、避けてるっちゃ避けてる」咳払いをして、僕は曖昧に答えた。

「え？　嘘、ほんとに？」どうやら本気で言っていたわけではないらしく、彼女は驚いた。

「なんで？　私、中瀬くん何かしたっけ？」
「そういうわけじゃないけど……」

「じゃあ、なんで避けるの？」彼女は少し身を乗り出す。

言わせるのか？　僕に。それを。

まあ、そうだろう。僕と彼女は何の関係もないのだから、気にする理由がない。

僕が気に入らないだけだ。

「だって、天城さん、僕の知らない人といったから」僕はたった一つの単語を言いたくなくて、慎重に言葉を選んだ。

彼女は僕が何を言いたいのかわからないよう

で、首を傾げた。

口に手を当てて、心を静めようとする。冷たい汗が背中を伝った。

「そういうことだよ」僕はすべてを言葉にしたくなくて、会話を打ち切るうとした。

「どういつこと？」彼女は納得がいけないようで、説明を求めてくる。

「声かけたらお邪魔かなと思って」僕は茶化すように言う。

嘘ではないけれど、本心でもなかった。ただ単に、彼女が誰かと一緒にいるのを見たくなかっただけだ。

「なんだ、そうだったの？」彼女は明るく言う。「気にしなくていいのに」

「確かに、気にしなくていいんだろっつね……」
彼女のことを気にしてしまうのは、やっぱり、気になってしまつからで。

どうして気になるのかも、本当はわかってい

る。どれだけ言い繕ったところで、気持ちは変えられないのかもしれない。隠すことはできるけれど、それは表に出していないだけで、彼女のことを見ていないわけじゃない。

このまま隠していれば、やがて消えてくれると思った。

想いは言葉にしなければ伝わらない。なら、

言葉にさえしなければ、誰にも伝えなければ、想いはなかったことにできる。

そう思っていた。

でも、この状況。

いるのは僕と彼女。

電車を待つ人達の中で、ここにいるのは二人だけ。

いや、無理なのはわかっている。どう転んでも、僕の気持ちが受け入れられることはないだろう。

でも、だからこそ、いつまでも悩んでいるくらいなら、はじめをつけたほうがいいのかもしれない。

それに、もしかしたら、もしかするかもしれないじゃないか。

僕に声をかけてくれた。

僕を覚えていてくれた。

僕に、気付いてくれた。

この状況で期待してしまつのは、僕が馬鹿だから？

馬鹿でも、いいさ。

今なら言える。

「あゝさ」

「ん？　何？」

胸が熱くなる。

息が苦しくなる。

気を抜くと、気を失いそうだ。

彼女は僕を見ている。

僕も彼女を見ている。

彼女は微笑んでいる。

僕は笑っていない。

まるで、笑い方を忘れたように。

「僕は」

僕は、君のことが

ずっと、ずっと前から

その時。

きらり、と、何かが光った。

彼女の左手の薬指の銀色が。

きらきらと　月のように光っていた。

ああ。

「電車、来たよ」僕は声になりかけた言葉を呑みこんで、別のことを言った。体温が一気に下がる。

ガタガタと、ホームに電車が入ってくる。始めは一本の線だった光が減速して、ガラス窓に変わっていき、やがて停車した。

彼女は立ち上がり、近くの列の最後尾に並ぶ。

「あれ？　中瀬くん、乗らないの？」ベンチに座ったままの僕を見て、彼女は言った。

「それ、各停でしょ？　次の急行に乗るよ。そ

っちのが早いから」

「そう？　私の降りる駅、急行は停まらないな

……。じゃあ、ここでお別れだね」

「うん。じゃあね」

彼女は数人の人に交じって電車に乗った。そのまま一度も振り返らなかった。ドアがゆつくりと閉まり、彼女を運ぶ電車は明るいホームを離れ、夜に消えていった。

そしてまた、ホームに人がいなくなる。

鞆から煙草を取り出し、口に咥える。ライターはズボンのポケットに入っていた。

火を点けて、煙を深く吸い込む。

喉が少し熱くなり、多少の刺激で肺が満たされる。

ゆつくりと煙を吐いた。それは溜め息だったかもしれない。

白い煙が風に流れて、照明の光の中に霞んでいく。

電光掲示板を見る。僕の降りる駅も、急行は停まらない。だから、次の各停まで、また待たなければいけないってしまった。

「何がしたいんだ、僕は……」

ベンチにもたれて、空を仰ぐ。

月は雲に隠れ、もう見えない。

代わりに、月よりもきれいな銀が、僕の中で残像になって光っている。

すごく嫌なことが、またあった。